

物流事業の ターニングポイント

第2部

「もう廃業するしかないのか」。荷主の物流体制変更に伴う危機が越野運送（大阪市都島区）を襲ったのは、今から20年前のことだった。当時、1社の荷主に依存していた同社を窮地から救ったのは、越野泰弘社長（50）の父、越野圭一氏（故人）が築いた人脈と信用、そして「百忍百謝」を社是とする忍耐と感謝の経営姿勢だった。

ら、原料や製品の地場輸送を中心に事業を広げていく。ところが、オイル・ショックの後、地元の繊維産業は急速に衰退。代わって主力となったのが、生活関連物資のレンタル会社の配送業務だった。圭一氏は「人の役に立ち、喜んでもらえる仕事」をモットーに、小回りの効く輸送サービスを展開。82年頃にはレンタル会社の仕事がほぼ100%にまで達した。

1932年に祖父の越野友次郎氏（故人）が創業、戦時統合を経て53年に圭一氏が越野運送を設立した。近隣にメリヤス工場が多かったことから、圭一氏は急逝する。大学

1 社依存で危機

業態転換がスムーズに進み、経営も軌道に乗った88年、圭一氏は急逝する。大学

越野運送



「18年後の創業100周年を目標に、着実に歩を進めたい」と越野社長

「シェア100%の荷主が無くなれば、事業を続けていくことはできない。これまで新規開拓をしてこなかったツケが回ってきた」と後悔したもの、どつすることもできなかった。

このような中、「お父さんには大変お世話になった。代わりの仕事を紹介させて欲しい」。荷主のある幹部の一言に救われる。泰弘は「まさに『捨てる神あれば拾う神

人脈と信用で窮地脱す

を卒業し「修業中」だった越野氏は突然呼び戻され、社長に就任した。

「生まれた時から運送が家業だった」というだけで、経営の中心は何も分からなかった。しかし、考えている時間は無かった。ドライバーも不足しており、欠員が出る度に自らハンドルを握りながら、体で経営のノウハウを学

3年ほど経つと、何とか社内体制が安定。定着率アップのためドライバーの給与を上げ、買い控えていた車両を代

替した矢先、荷主から物流体制変更の話が持ち出された。少しずつ仕事は減り始め、先行投資が経営を圧迫、待遇の悪くなったドライバーは次々と辞めていった。

あり」だった。この時ほど父の存在の大きさを感したことはなかった。「目を潤ませる。荷主の調達先など数社を紹介してもらい、夢中で仕事をこなすうち、できる限り自社車両で運ぶ」という堅実な姿勢と高い輸送品質が評価され、次第に受注が増えていった。元の荷主の仕事も、現場責任者の「越野運送は替えな

捨てる神あれば拾う神あり

いでもらいたい」という声のお陰で、結局、全てを失うことはなかった。「粘り強い忍耐と感謝の心を忘れてはいけない」という父の姿勢と信用のお陰で、今の私と会社がある」

永続できる企業へ

その後、精密機械、機械部品、医療用機材といった分野の荷物が増加。法令順守や環境対策にも力を入れ、2008年には品質管理の国際規格ISO9001とともに、グリーン経営認証を取得。04年から10年連続で、近畿運輸局の優良自動車運送事業者表彰を受賞している。

泰弘氏は「人を育てること、品質に徹することで社内には好循環が生まれ、強い体質に脱皮することができた。これからも、いたずらに規模を追うのでなく、永続できる企業づくりにまい進したい。当面は18年後の創業100周年を目標に、着実に歩を進めたい」と強調する。（小莫史和）